

訳者後書きより（抄）

石井啓一郎

『フェルハドとシリン』は作者ヒクメットが反体制派として獄中にあった一九四八年に、ペルシアの伝説的物語を素材に、自由に編んで、幻想的で洗練された詩的な筆致で描いた愛の物語である。トルコ・ペルシアの濃厚な香りを漂わせた解り易い物語であり、そこに愛と慕情、あるいは嫉妬や無意識的に宿る暗い情念まで、細やかに登場人物の心の^{ひだ}襞を描く心理劇としての面白さもあって、彫りの深い傑作である。

(なお本掲載稿は、本書の訳者後書きをHP向けの短縮・^{はっすい}抜粋版として作成したものであり、その目的に則り順序、構成や表現には若干の変更がなされている)

ナーズム・ヒクメットの生涯とその時代

ナーズム・ヒクメットは一九〇二年に落日のオスマン・トルコ帝国領であったサロニカ（現ギリシア テサロニケ）に生まれた。父方はオスマン朝治下に軍事、行政の要職を占めた名門貴族の家門であり、一方母親はポーランドの血統を引くユグノー教徒の家柄であったという。つまり、彼はトルコ・オリエントの名門の血を引く父と、西欧近代主義的な思潮のなかに育った母との間に生まれた子供であった。かつては東地中海に君臨して、欧州に対する深刻な脅威となったオスマン・トルコ帝国も、この時期にはもはや誰の目にも^{ちようらく}凋落は明らかな状態にあった。一九〇八年には青年トルコ党革命によって、オスマン朝の専制政治から一八七六年憲法に基づく憲政が復活した。だが多民族多宗教を内に擁して緩やかな統合によって成り立ってきたオスマン帝国にあって、既に顕在していた様々の矛盾や、異なる利害や価値の対立を前に「帝国」は間違いなく崩壊への道を辿っていた。大戦後に国家としての存在が危殆に瀕していたトルコは、自己の保身に汲々とするイスタンブールのスルタンと外国勢力に抵抗して、救国と国土回復の偉業に乗り出したのであった。英国を中心とする外国勢力に逆らえないイスタンブールの政府に対抗し、アナトリアのアンカラに拠点を遷して再起をかける^{いわゆる}所謂「アナトリア抵抗運動」の象徴的指導者が、のちにトルコ共和国初代大統領としてアタテュルクの称号を冠することになる、ムスタファ・ケマルその人であった。ムスタファ・ケマルは、一時はイスタンブールのスルタンからは死刑を宣告された身となり、さらに英国の後ろ盾を得たギリシア軍の圧倒的な大攻勢にも曝されるという、絶体絶命の危機的な状況に置かれる。それでもギリシア軍を一九二一年のサカリヤ川の会戦で食い止め、さらに巧みな仏、伊への外交攻勢によってアンカラの政府の国際的認知を得てセーヴル条約の体勢を切り崩し、イスタンブールのスルタン政権を廃位に追い込んで共和制を敷くに至る。当時のこうしたトルコの救国運動が成功を収める鍵として、当初唯一セーヴル条約を批判し、アンカラ政府を国際的に認知したソヴィエトの支援を無視することはできない。

ヒクメットの成長過程から青年期に達する時代は、このような流れのなかに展開していた。一九一七年に海軍兵学校に入った若きヒクメットも、この環境のなかにあって、愛国的な運動に参加するなか、次第に社会主義運動に共鳴してゆくことになる。一九二一年、ヒクメットはイスタンブールを捨て、アナトリア抵抗運動の展開する小アジアを目指し、「首都アンカラ」を初めて目にする。それから、ボルの街の教師となるが、その間にはドイツでスパルタクス団（ドイツ共産党の母体となった革命党）の運動に参画して救国の戦いに合流するために戻ったトルコ人活動家と交流を持ち、また小アジアの農民生活に親しみ、彼らの救国戦争への献身ぶりと、生活の惨状とをともに目の当りにする。同年末、彼はソヴィエトを目指して出発し、翌年からモスクワで東洋勤労者共産主義大学に学び、詩人のマヤコフスキイやバグリツキらと親交を結ぶ。

このわずか三年の間に、祖国は根幹から変わっていた。まず一九二三年には、オスマン朝の最後のスルタン、アブデュルメジトが廃位され、ここに「オスマン帝国」は^{しゅうえん}終焉を迎えて、新たにアンカラを首都とする「トルコ共和国」が成立した。さらに二四年には、まだ全ムスリムに対する宗教的権威としての「カリフ」の位を保持していたアブデュルメジトが、ついにカリフ権をも奪われてしまう。ここにトルコ共和国は、西欧型政教分離を国是とする世俗国家として、新たな出発を記していた。こうした情勢のなかで、トルコに帰国したヒクメットを取り巻く環境は、次第に苛酷なものとなってゆく。スイス民法典に^{なら}倣った西欧的法体系の導入やトルコ帽の禁止のように、ム

スタファ・ケマルはオスマン帝国の社会の枠組みを根こそぎ排した西欧型世俗化改革を急激に断行していた。折りしも世界恐慌から第二次大戦に向かう時局にあったことを考えれば、若い共和国を近代国家の構想へ導こうというとき、こうした難しい情勢のなかで、当時のトルコ共和国が相当に言論封殺的で、迂闊にももの言えない危険な状況になっていた。

こうした情勢のなかでヒクメットは、革命主義的な雑誌等の仕事に従事するが、結局政府の弾圧で再び一九二五年にモスクワへ脱出する。精力的な著作活動に伴って、拘留と釈放を繰り返したヒクメットだが、一九三八年に逮捕されると、翌年に懲役二十年の判決が下され、四〇年からブルサの監獄に収監される。獄中の苛酷な生活のために、心身ともに健康を害しながらもヒクメットはなおも詩作、小説、戯曲や文学翻訳等の執筆活動を続けた。本作『フェルハドとシリン』が書かれたのも、彼がブルサの監獄にいた一九四八年のことである。今次の獄中生活は一九五〇年に国際世論の粘り強い支援によって釈放となるまで続く。しかし、早くもその翌年、ヒクメットは兵役への召集令状を受け取る。身に迫る危険を悟ったヒクメットは、この年に密かにトルコを後にしてソヴィエトへ亡命し、二度とトルコに戻ることはなかった。その後ヒクメットは、ソヴィエトを本拠として執筆、詩作活動を継続するが、一九六三年の六月三日に世を去る。なおヒクメットの死の翌年、二十八年来発禁扱いにしていた彼の詩作がようやく彼の祖国トルコで刊行された。

(本稿において当時の歴史的諸事権やその意義については、日本語で書かれた近代トルコ通史である新井政美氏の「トルコ近現代史 イスラム国家から国民国家へ」(2001年 みすず書房)におけるご高説を全面的に参照させていただいている。

二十世紀トルコ文学の旗手としてナーズム・ヒクメットを読む

ナーズム・ヒクメットの名は、日本ではこれまで「革命」を信じた「反帝の闘士」として、特に一九七〇年代頃の左翼運動盛んなりし頃に形成されたイメージが強かった。だが一方で、文学者としてのヒクメットを語る時、彼がトルコの国土とその風土、自然、民俗等を深く愛し、その伝統的文化の豊穡さを現代的語法の中に投影させ、新たな生命を吹き込もうとした独特の作風の文学者であったこと、その文学技法の妙といったものが示す芸術性を無視することもできない。こうした、トルコ伝統文化の継承者として、彼がいかなる創作を行ったかという問題は、また政治性と一線を画して研究すべき文学上の課題である。そこには、中央アジアの遊牧族であったトルコが、小アジアで定住生活へと移行してゆくなかに形成し、口承を主として守ってきた多くのフォークロアや民衆詩の形式、オスマン帝国の宮廷で発展した高踏的で技巧的な宮廷詩、トルコの文化と不可分な宗教であり価値体系であるイスラーム、さらにトルコ文学や宗教現象に否みがたい影響を与えてきたペルシアの文化、それにヒクメットの二十世紀的知性の在り方といった諸要素を彼の膨大な詩作、著作に即して検討してゆかねばならない。

『フェルハドとシリン』を読む面白さ

「愛すること」の多面的価値観：社会思想的価値、トルコ民俗文化的価値

シリンという一個人への思慕から、渇水に苦しむ人々に全人的に開かれたものへ展開するフェルハドの愛を描く本篇は、多用な意味において「愛」という精神作用の奥深さを描いている。それは人へ向けられる愛であると同時に、神的実在との実存的合一を目指す宗教的精神性でもあるといえる。山に籠ったフェルハドは、十年の歳月を経て具象的存在としてのシリンの顔を忘れてしまう。それでも、なお彼の前にシリンは「白く輝く光」として遍在し、彼は「生命に溢れたもので、幾重にも火花を散らして、それから近くに、僕自身の肌よりもなお僕に身近にあるもの」となったシリンを求めながら彼は人々のために槌矛を振るう。十年の歳月を隔てた「シリンの美しい顔」の思い出と、シリンに達するという希望とが、なおも何時完遂できるとも知れぬ偉業に挑む彼の意志を支えている。そのうちに「恋する者が己の眼から、口から、手から遠くにあっても、恋人に己の凡てをもって到ろうと求めたい」と言う彼の前に、試練を免ずるというメフメネ・バヌの意志を他ならぬ「シリンその人」が伝えに訪れる。試練に甘受した理由であったはずの目的が、今や譲許されたのである。ところが、彼にとっての「シリン」は「世界中を愛し、人々を愛し、泉から流れる水を愛する」ということと不可分な存在であり、それによって「シリンを日々少しずつ見失ってゆく」という一種のパラドックスに陥っていた。つまり、全人的、普遍的愛を支え、それと不可分な存在となった象徴的存在の「シリン」が、彼にとっては「可視的、具象的現実」を超越する実在になってしまったので

あった。結果として、彼は他ならぬ「シリソの人」を退け、永遠の別れになるであろうことをほぼ承知しながら、彼女と離別する。

「美貌を失った美女」メフメネ・バヌの悲劇：「顔」と「肉体」の二項対立的意味論

また本篇は、イスラーム文化論的に興味深いモチーフを示しているように思われる。往々にして「女性への抑圧」という単純な図式のみで考えられがちな、女性の「顔の秘匿^{ひとく}」の意味論ということが挙げられる。『フェルハドとシリソ』においては、美しい顔を失いながらも「王国でもっとも美しい女体」をなお持ちつづけるメフメネ・バヌ、そして姉から譲り受けた美しい「顔」を持ちながらも「姉と並べば、杉の傍らにある柳のような」貧相な肉体しか持たないシリソ、という二人の対立構造がフェルハドをめぐる現出する。しかし、劇中で宰相と乳母が次々にいうとおり、メフメネ・バヌは美貌を失ってもなお肉体（俗な言い方をすれば「首から下」）と権勢、富という、男の世俗的欲望に応じて充足を与えることのできる立場である。だが、いかに乳母や宰相が奨めても、メフメネ・バヌはその「異教の神像のように美しい女体」をフェルハドに投げ出して迫ることをしない。こうした点を見るに、おぼろげに感じるのは「顔」というものが、世俗的セクシュアリティに充足を与える「肉体」、に反して、何かより高次の価値を象徴する意味を備えているのではないかという疑問が浮かぶ。それは、既に上述したごとく、シリソの「美しい顔」が、フェルハドをより普遍的な愛のかたちへと駆り立て、邁進させる力になり、それが「現実以上の現実」と変容することの意味とも無縁ではあるまい。勿論、この疑問はこの場で明快な解を示せる問題ではない。宗教学、社会学や人類学的な様々の角度から総合的に考察すべき問題で、このような場で軽々な断定は厳に慎むべきことであろうと心得ている。ただ、本作のみに即して言うなら、シリソの「美しい顔」は単なる「性愛」と峻別すべき、何かしら超越的でより高次の「愛」という別の価値を象徴していることは確かであろう。そこに或いはイスラーム世界で「顔」という部位に、特に何か独特の精神性に関わるコノテーションが付与されていないか、そこに単なる「女性抑圧の象徴」というのと異なった次元での「顔を秘匿^{もちろん}すること」の深い意味を考えるヒントもあるのかもしれない、と訳者なりの疑問符をここに書き記しておきたい。

(了)